

日本語学習者と日本語母語話者の持つ「で」の カテゴリー構造比較

水口里香(同徳女子大学講師) 森山新(お茶の水女子大学教授)

1. 研究目的

認知言語学において、習得とは、カテゴリーの習得、意味・語彙の習得が中心であると言われていたが、日本語の格助詞「で」の習得に関しては認知言語学的な観点からの研究がほとんど行われてこなかった(森山 2004b)。認知言語学的な観点から見た「で」は、プロトタイプ的な意味を中心とした放射状カテゴリー構造を持つのであるが、日本語学習者と日本語母語話者の持つ「で」の意味のカテゴリー構造には、どのような違いがあるのだろうか。本稿の目的はこの点を明らかにすることにある。

2. 先行研究

多義語のプロトタイプ及び放射状カテゴリー構造に関する研究；田中編(1987),今井(1993)他
認知言語学的観点による「で」の研究；菅井(1997,2001),間淵(2000),森山(2004a,b)他

3. 調査

韓国では 2003 年 8 月に、日本では 2004 年 6 月に実施した。調査対象者は、日本人大学生(日本 M 大学人文学部 1~4 年生)52 名と韓国人大学生(韓国 K 大学日本語学科 3~4 年生)37 名で、下の 19 文を一文ずつ書いたカード(計 19 枚)を提示した。この 19 枚は、森山(2004b)の意味構造が持つ「で」の 5 つのカテゴリー下にある 19 の下位カテゴリーからそれぞれ 1 つずつの例文を作成したものである。19 のカテゴリーと例文は以下のようなものである。そして対象者に「で」の意味の類似性に基づき、グループ分けするよう求めた。その際、グループの数と各グループ内のカードの数は自由とした。

【調査文】

1. 2004 年の オリンピックは アテネ^で 開かれる。(場所：場所)
2. 彼は 社会主義の 環境^で そだちました。(場所：場)
3. 彼は この クラス^で一番 背が 高いです。(場所：範囲)
4. この ヘヤは 30 人^で いっぱいになります。(場所：数量限定)
5. その 事件は 警察^で しらべて います。(場所：動作主)

6. 食事のあと^で、勉強をします。(時間：時間)
7. 成長の過程^でときどき見られる現象です。(時間：期間)
8. 長かった夏休みも明日^で終わりです。(時間：時限定)
9. 日本人ははし^でごはんを食べる。(道具：道具)
10. 毎日地下鉄^で学校へ来ます。(道具：手段)
11. このつくえは木^でできています。(道具：材料)
12. 日本の文化というテーマ^で論文を書きました。(道具：構成要素)
13. 病気^で学校を休みます。(原因：原因)
14. 彼のアイデアは、その点^でおもしろいと思います。(原因：理由)
15. テストの結果^でクラスを決めようと思います。(原因：根拠)
16. 出張^で大阪へ行ってきました。(原因：目的・動機)
17. タごはんは自分^で作って食べます。(様態：動作主の様態)
18. 夜おそいので、小さな音^で音楽を聞きました。(様態：被動作主の様態)
19. 時速200キロのスピード^で走っています。(様態：出来事・作用の様態)

4. 結果と考察

今井(1993)を参考に、調査対象者から得られたデータを基にした類似性行列の作成、及びSPSS(Ver.10)を用いて非計量的多次元尺度解析を行った。学習者と母語話者、両グループの空間とも3次元解で妥当な空間への適合度が得られたので、それぞれの意味的位置関係は、3次元解での空間により、図1・2に図示する。(図中の番号は、上に提示した調査文の番号である。)

図1：学習者の3次元解空間

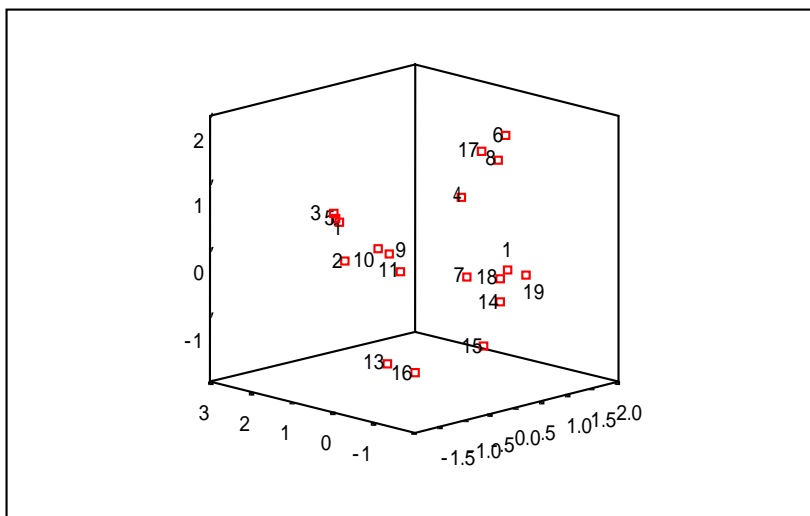


図2 母語話者の3次元解空間

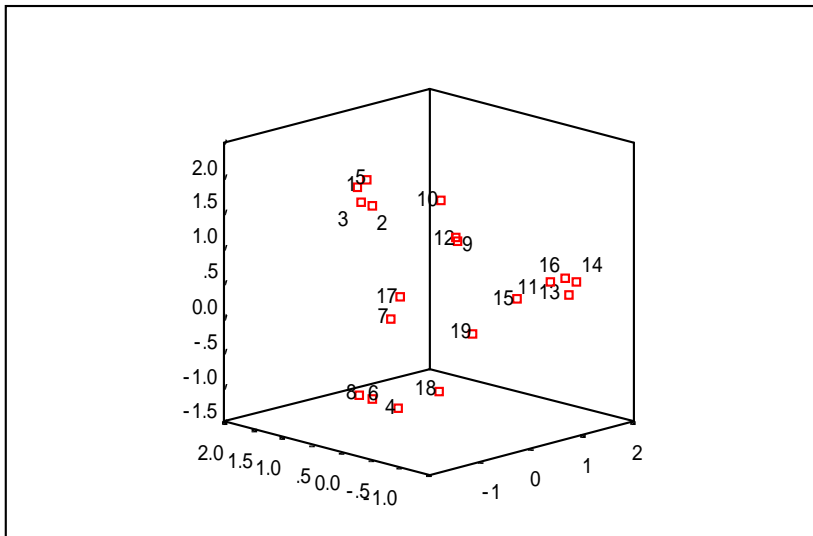


図1と図2を比べてみると、大まかな配置としては両者に大きな差がないように思われるが、より細かいレベルで見ると、両者の間には、いくつかの重要な違いが見られた。

1点目は、母語話者の3次元空間に現れたクラスターは、〈場所〉・〈道具¹〉・〈原因〉という「で」の意味用法別にクラスターを形成しており、しかもその項目間が密接にしているのに対し、学習者のほうは、〈場所〉を表す意味クラスターが存在するものの、そのクラスターは母語話者のものよりも広く、また〈道具〉の意味用法を持つ項目(=調査文9・10・13)も含んでいるものであった。クラスターのまとまりはカテゴリー化を反映していると考えられることから、学習者は〈場所〉という意味用法を「で」のプロトタイプとして認識しているものの、そのカテゴリーは〈道具〉をも取り込んでおり、母語話者よりも広く、漠然としていると言える。

2点目は、〈原因〉という意味用法に関してである。上述の通り、母語話者のほうは項目間が密接して、ひとつのクラスターとして纏っているのに対し、学習者のほうは、空間内での距離が遠く、非常に拡散的であった。これは、森山(2004b)が示しているように、学習者にとって〈原因〉は習得しにくい意味用法であることの表れだと言えるだろう。

次に、学習者・母語話者別の考察を行っていく。まず、学習者の結果に対する考察である。韓国語には、日本語の「で」に一一対応する助詞がなく、文中の意味により[], [], []のいずれかが対応するという一対多対応の関係である。したがって、母語である韓国語の転移によるカテゴリー形成、つまり[], [], []のそれぞれのカテゴリーを反映したクラスター形成が予想されたが、学習者の3次元空間に現れたクラスターのほとんどに[], [], []が混

¹ ただし、〈道具〉の拡張用法である「要素(調査分12)」は、〈道具〉カテゴリーの一員として認識されていなかった。

同しており、母語による判断とは考えにくい結果となった。語のプロトタイプや意味構造を追究した先行研究の多くで「母語の影響を受けやすい」ということが明らかにされているが、本稿の調査は、先行研究とは必ずしも一致しない結果が得られたと言える。しかしながら、学習者がどのような基準によって「で」の意味をグループ化したかに関しては、解らないままである。今後は、他の調査方法を用いるなどして、明らかにしていく必要があるだろう。

最後に、母語話者の結果を考察していく。上にも記したが、母語話者の3次元空間は意味用法により纏まっている場合がほとんどであったが、〈場所〉の拡張用法「限定(調査文4)」と〈時間〉の拡張用法「期間(調査文7)」、及び〈道具〉の拡張用法「要素(調査文12)」はそれぞれのクラスターから離れており、また〈様態(調査文17・18・19)〉に関しては、すべて拡散的に存在していた。これは、調査文に使用された語彙の影響とも考えられるが、「限定」という用法は、〈場所〉という意味用法が動作の抽象化及び境界の焦点化によって形成されるとした森山(2004a)の図を再検討する必要があることを示唆しているとも考えられる。

5.まとめ

本稿は、格助詞「で」について、認知言語学的な観点からの調査を行い、日本語学習者と日本語母語話者が持つ「で」のカテゴリー構造を追究した。しかしながら、今回の調査では、母語話者と学習者それぞれが認識している「で」の意味のカテゴリー構造が異なっていることはわかったが、プロトタイプが何で、どのような放射状カテゴリー構造を形成しているかまで、明らかにすることはできなかった。したがって今後は、妥当なデータを得るために他の調査方法も用いて、研究を進めていく予定である。また韓国語以外の言語を母語とする学習者を対象に同様の研究を積み重ね、「で」の放射状構造の全貌を明らかにしていきたい。

参考文献

- 今井むつみ(1993)「外国語学習者の語彙学習における問題点 言葉の意味表象の見地から」『教育心理学研究』41、243-253
- 菅井三実(1997)「格助詞『で』の意味特性に関する一考察」『名古屋大学文学部研究論集』12(文学43)、23-40
- (2001)「現代日本語における格の暫定的体系化」『言語表現研究』17、兵庫教育大学言語表現学会109-119
- 田中茂範編(1987)『基本動詞の意味論 コアとプロトタイプ』三友社
- 間淵洋子(2000)「格助詞『で』の意味拡張に関する一考察」『国語学』51、国語学会 15-30
- 森山新(2004a)「格助詞デの放射状カテゴリー構造と習得との関係」『日本認知言語学会論文集』4、日本認知言語学会 66-75
- (2004b)「多義語としての格助詞デの習得過程：認知言語学的観点から」『2004年日本語教育国際研究大会予稿集 発表』1、日本語教育学会他 77-82